

The National Conference of Community Cinemas 2007 in Tokyo

全国コミュニティシネマ会議 2007

(コミュニティシネマ/上映者ネットワーク会議 改称)

2007年8月31日[金]～9月1日[土]

東京国立近代美術館フィルムセンターを会場に開催！

日程

2007年8月31日[金]～9月1日[土]

会場

東京国立近代美術館フィルムセンター

東京都中央区京橋 3-7-6 (ご案内図をご参照ください)

<http://www.momat.go.jp/fc.html>

参加費

会議 (映画上映含): 2,000 円

※ 8月31日、9月1日共に参加可。一部のみの参加も同じ。

※ 映画上映のみの参加はできません。

レセプション: 3,000 円

主催: コミュニティシネマ支援センター

財団法人国際文化交流推進協会(エース・ジャパン)

東京国立近代美術館フィルムセンター

支援: 文化庁

※ 内容(出演者等)は変更になる場合がございます。ご了承ください。

参加を希望される方は、別紙の申込用紙にご記入の上、

8月24日(金)までにファクシミリ(FAX.03-5562-4423)にてご送付ください。

(ご出席申し込みに対しては、折り返し確認書をお送り致します。)

※定員を越えた場合、お申込を受けられない場合がございます。ご了承ください。

お問い合わせは下記まで

◇ コミュニティシネマ支援センター/エース・ジャパン

TEL | 03-5562-9574 FAX | 03-5562-4423

www.jc3.jp

www.acejapan.or.jp

The National Conference of Community Cinemas 2007 in Tokyo

全国コミュニティシネマ会議 2007

今回のテーマは、
“映画を伝達する”

いま、映画産業は、「好調」と一般的に伝えられている。だが、薄く広く広がった映画状況は、必ずしも豊かとは言い難いのも事実である。「どれもこれも似たり寄ったりの映画ばかり」ということを、多くの観客が実感しつつも、それらをただ「消費」することで通り過ぎてしまい、後に残るのは、興行成績と、★印の採点だけ、という貧しいものになってしまっているのが現実だ。

その中において、多様な作品と多様な観客が作り出す豊かな映画環境を、再構築しようというのが、今回のコミュニティシネマ会議の骨子である。

映画を送り届ける「場」をここでは「上映装置」と名付けて議論を進めることになる。それは、いまや、ただ単に「鑑賞機会」を生むだけでは映画も観客も育ち得ず、より積極的・自律的な上映が望まれると考えるからに他ならない。

この装置の重要な燃料として、映画の質と、観客の理解力・選択眼を養う「批評」の復権について、まず論議したい。さらに、この装置を機能させる具体的なかたちを、上映システムの観点から模索してみようと思う。

より厚みのある映画環境を創出する「上映装置」によって、「来るべき映画」「来るべき観客」が生まれることを願って。

「全国コミュニティシネマ会議」は、

さまざまな場で“映画を見せること”を行っている人々の情報交換と研究討議の場として、1996年から毎年開催されているものです。主に映画祭関係者、公共ホール・美術館・図書館の映像担当者、自治体の文化事業担当者、シネクラブの主催者、ミニシアターを中心とした興行関係者、自主上映団体、独立系配給会社等々が集まります。映画の上映に興味のある方ならどなたでも自由にご参加いただけます。

The National Conference of Community Cinemas 2007 in Tokyo
全国コミュニティシネマ会議 2007

“映画を伝達する”
プログラム

※ 出演者等は変更になる場合がございます。ご了承ください。

8月31日[金] 会場:大ホール

13:00 開会

主催者挨拶

コミュニティシネマ支援センター「活動報告」

13:30~14:30 基調講演 『モンゴメリー・クリフ (ト) 問題』について—映画史のカノン化は可能か?—

蓮實重彦 (映画批評家/東京大学元総長)

14:40~16:30 ディスカッション1「映画の伝達—作り手と観客とのほざ間で」

現代の文化状況において、コミュニティシネマの活動はどのような役割を果たすことができるのか。映画の作り手が文化産業の中に深く組み込まれ、観客が単なる消費者と化した現在、コミュニティシネマには、この両者の関係を再構築し、創造活動を活性化させるという重要な役割を果たすことが求められています。上映装置(場、システム)の再構築、映画教育プログラム、批評空間の再創出などをトピックとして、幅広い視点からコミュニティシネマの意味を考えます。

パネリスト

村山匡一郎 (映画研究者)

映画の批評、研究、翻訳などの活動の傍ら、大学などでも教鞭をとる。著訳書に『日本映画とモダニズム』(共著、リプロポート)『世界映画全史』(共訳、国書刊行会)、『映画史を学ぶクリティカルワーズ』(共著、フィルムアート社)など。コミュニティシネマ支援センター運営委員として、映画教育調査に携わる。

岡島尚志(東京国立近代美術館フィルムセンター主幹)

1979年から、フィルムセンターの上映・保存・調査・出版・国際交流事業、各種イベントの企画・運営に携わる。代表的なキュレーション番組に「ラオール・ウォルシュとその時代」(86)「知られざるアメリカ映画」(93)「日本映画の発見」(96~02)「ハワード・ホークス映画祭」(99)「韓国映画—栄光の1960年代」(02)等。国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)運営委員(03~)。副会長(04~)。2005年より現職。

山根貞男 (映画評論家/東海大学教授)

映画評論家として、新聞・雑誌に映画評を執筆するのはもとより、映画監督や俳優など作り手へのインタビュー、撮影現場ルポ、過去の映画を新しい角度から見直して埋もれた映画の富を再発見する書籍づくり、失われた映画フィルムの発掘、内外の映画祭での上映プログラムの企画などにも積極的に関わっている。著書に(筑摩書房)『映画の貌』(みすず書房)『現代映画への旅』(講談社)、『日本映画時評』『増村保造—意志としてのエロス』『日本映画の現場へ』(いずれも筑摩書房)『活劇の行方』など多数。

堀越謙三(ユーロスペース代表)

1977年よりシネクラブとしての活動を開始。1982年配給会社・ミニシアター「ユーロスペース」を設立。ヴェンダース、張芸謀、アルモドヴァール、カラックス、キアロスタミ、オゾンらを日本に初めて配給した。「スモーク」「TOKYO EYES」「ポーラ X」「まぼろし」など、海外との共同製作、若手監督等の作品の製作も手がける。1997年、映画美学校を開校。1998年金沢市の香林坊に映画館「シネモンド」を開館。2005年4月より東京芸術大学大学院映像研究科教授。コミュニティシネマ支援センター事業推進委員長。

他

16:40~17:40 ディスカッション2「上映装置を再構築する」

ディスカッション1の議論を受けて、具体的な上映装置について検証します。コミュニティシネマという言葉が生れて5年、映画を取り巻く環境は大きく変化しています。コミュニティシネマのネットワークは、これまで「情報ネットワーク」に近いものに止まっていた。今回は、さらに具体的、複層的な新しい映画の「流通ネットワーク」構想を提起し、その可能性を考えます。

司会

佐伯知紀(文化庁文化部芸術文化課芸術文化調査官/映画史家)

東京国立近代美術館フィルムセンター研究員を経て、03年から文化庁に勤務。04年から本格的に始動した「日本映画・映像振興プラン」の諸事業の立ち上げに関わり、映像分野の拡充に伴走しつつ今日に至る。映画史家として「映画読本 伊藤大輔」(フィルムアート)「映画美術に賭けた男 中村公彦」(草思社)等の編著がある。

パネリスト

堀越謙三(ユーロスペース代表)

松本正道(アテネ・フランセ文化センター主任/コミュニティシネマ支援センター運営委員長)

1979年より現職。「古典映画の再評価と同時代作家の発見」をテーマに年間200本以上の世界の映画を上映。主な企画に「ダニエル・シュミット映画祭」「淀川長治映画塾」など。「書かれた顔」(ダニエル・シュミット監督)アソシエイト・プロデューサー。1997年には、ユーロスペースとともに映画美学校を開校。編著に「芸術経営学講座(映像編)」(東海大学出版会)など。

田井肇(大分・シネマ5支配人)

1976年の第1回より湯布院映画祭の実行委員をつとめ、その後、映画祭を離れ、1989年よりミニシアター「シネマ5」の経営に携わる。シネコンの台頭によりヒット作品が一極集中する一方で、観客がDVDへとシフトしつつある現在の映画状況におけるミニシアターの役割を考える。2006年6月より大分県興行組合・理事長をつとめる。

前澤哲爾(全国フィルム・コミッション連絡協議会専務理事/山梨県立大学国際政策学部国際コミュニケーション学科准教授)

ソニーPCLでビデオ番組技術協力、ハイビジョン推進担当などを経て、96年広報室長、日韓の映画製作支援プロジェクトの事務局長を兼務。99年から仕事とは別に「日本にフィルム・コミッションを作る」活動を開始、01年全国フィルム・コミッション連絡協議会発足、副会長(専務理事)に就任。04年、プサンFCと協働してAsian Film Commissions Network(8カ国加盟)を設立。05年より山梨県立大学にて教鞭をとる。

とちぎあきら(東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員)

ニューヨーク大学大学院映画研究科修士課程を卒業後、「月刊イメージフォーラム」編集長を経て、フリーで映画に関する翻訳や執筆をするかたわら、「アモス・ギタイ映画祭」「イスラエル映画祭」「地中海映画祭」の作品選定に関わり、2001年~2002年、ヨーロッパ、アメリカ、韓国で「映画文化振興制度調査」を行う。2003年より現職。映画フィルムの収集・保存・復元および貸与などのアクセス対応に従事する。

18:00~ レセプション 会場:6階

9月1日[土]

10:00~11:45 分科会

分科会では、初日のディスカッションで提起されたふたつのネットワーク構想について話し合います。

分科会1:コミュニティシネマの上映装置1—アートシネマ・シンジケート(仮称)構想 会場:大ホール

アート系映画上映および製作は、世界的に困難な状況に追い込まれている。ここでは、事前に映画製作者、配給者などからヒヤリングを行い、主に流通の面から現在の問題点を洗い出し、それを踏まえて、上映ルートの組織化に関する提言と、観客育成の具体策について議論を行います。

司会:堀越謙三 (ユーロスペース代表) / **田井肇** (大分シネマ5支配人)

映画製作関係者 / 流通(配給)関係者 / 上映関係者 ※現在検討中。

分科会2:コミュニティシネマの上映装置2—シネマテーク・ネットワーク(仮称)構想 会場:小ホール

映画専門施設や、上映施設を有する美術館、図書館など(シネマテークと仮称)が、より協働的に組織化されることで、その活動の幅と質がどう変わるのかを検証し、ネットワークのシステムと来年度に向けた具体的な共同企画の検討を行います。

司会:松本正道 (アテネ・フランセ文化センター主任/コミュニティシネマ支援センター運営委員長)

小川直人 (せんだいメディアテーク学芸員)

2000年よりせんだいメディアテーク準備室および学芸員として勤務。主にスタジオシアターの企画を担当。蓮實重彦氏による連続講座「映画への不実なる誘い」、「ペドロ・コスタ 世界へのまなざし」といった企画や市民の実行委員会による「ショートピース! 仙台短篇映画祭」を開催している。近年では映画教育プログラムも数多く手がけている。

出席予定団体:

アテネ・フランセ文化センター/ 青森県立美術館/ せんだいメディアテーク/ 愛知芸術文化センター/ 川崎アートセンター
広島市映像文化ライブラリー/ 福岡市総合図書館/ 高知県立美術館/ 神戸アートヴィレッジセンター/ 山口情報芸術センター
等

アドバイザー(オブザーバー):岡島尚志(東京国立近代美術館フィルムセンター主幹)/**市山尚三**(東京フィルメックスプログラムディレクター)/**矢野和之**(山形国際ドキュメンタリー映画祭東京事務局)/**古賀太**(朝日新聞社)他

11:45~12:00 まとめ 会場:大ホール

13:00~15:00 映画上映 会場:大ホール

東京国立近代美術館フィルムセンターの近年の収集・修復作品を解説付で上映します。
なかなか見ることのできない貴重な作品をみることができます。
上映作品については、下記をご参照ください。

15:15~17:00 コミュニティシネマに関するプレゼンテーションとディスカッション 会場:会議室

新しく開館したコミュニティシネマ、これから開館するコミュニティシネマ(川崎アートセンターほか)などのプレゼンテーションを聞き、アートシネマチェーン構想、シネマテークのネットワークなどを含め、今後のコミュニティシネマ活動について自由にディスカッションします。

司会:茂木正男(NPO 法人たかさきコミュニティシネマ/シネマテークたかさき代表)

上映予定作品 9月1日[土]13:00~15:00 ※解説付

※映画上映だけの参加はできません。

煙り草物語 (3分・24fps・35mm・無声) '24(監)大藤信郎

日本が誇るアニメーションの先駆者、大藤信郎の現存する最古の作品。同時に、実写とアニメの合成を試みた最古の日本映画と考えられている。

斬人斬馬剣 (26分・18fps・35mm・無声・部分) '29(松竹キネマ京都)

(監)(原)(脚)伊藤大輔(撮)唐澤弘光(出)月形龍之介、天野刃一、伊藤みはる、関操、石井貫治、市川傳之助、岡崎晴夫、中根竜太郎、浅間昇子

永らく失われたと考えられていた伊藤大輔監督による幻の「傾向映画」。2002年に9.5mm版が発見され、フィルムセンター初のデジタル復元作品となった。

石川五右衛門の法事 (21分・16fps・35mm・無声・短縮版)'30(松竹蒲田)

(監)斎藤寅次郎(原)絹川秀治(脚)池田忠雄、伏見晃(撮)武富善雄(出)渡辺篤、香取千代子、坂本武、横尾泥海男、青木富夫

恋人の父親に殺され成仏できない石川吾郎の前に現れたのは、先祖の大盗賊・石川五右衛門の幽霊だった。無声期の斎藤作品の魅力を堪能できる快作。1999年に発掘。

國士無双 (21分・18fps・35mm・無声・短縮版) '32(千恵プロ=日活)

(監)伊丹万作(原)(脚)伊勢野重任(撮)石本秀雄(出)片岡千恵蔵、高勢実乗、瀬川路三郎、渥美秀一郎、伴淳三郎、山田五十鈴

偽物の伊勢伊勢守が本物に勝ってしまうという、伊丹万作による「ナンセンス時代劇」の傑作。9.5mmと16mmの二種の原版をもとに2005年にデジタル復元を行った。

RHYTHM [リズム] (2分・16fps・35mm・無声) '35 (監) 荻野茂二

百年後の或る日 (10分・16fps・35mm・無声) '33 (監) 荻野茂二

前者は日本では珍しい抽象映画、後者はSF的な題材を扱った影絵映画。小型映画運動の先駆者・荻野茂二による9.5mm作品を、1994年に35mmへブローアップした。